

指導の手引き 幼児期と児童期の「学び」の 接続の推進に向けて



はじめに

教育基本法第11条において「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」と記されています。また、学校教育法第22条においては「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うもの」と記され、幼児期の教育が、学校教育全体の生活や学習の基盤を培う役割を担っていることが示されています。

また、幼児期と児童期の教育については、それぞれの段階における役割と責任を果たすとともに、両者の教育が円滑に接続して、教育の連続性や一貫性を確保し、子どもに対して体系的な教育が組織的にすすめられるよう、幼稚園教育要領や保育所保育指針、小学校学習指導要領において、幼小接続に関して相互に留意する旨が示されています。

これまで、幼児・児童の交流活動を中心に幼小連携がすすめられてきましたが、さらに子どもの発達や学びの連続性を保障するため、幼児教育機関と小学校においては、幼児期から児童期にかけての教育のつながりを理解することが一層重要になってきました。

幼児期の教育は、幼児の生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して、人とのかかわる力や思考力、感性、表現する力などをはぐくみ、人間として、社会とのかかわる人として生きていくための基礎を培うことを基本としています。この生きていくための基礎がその後の教育の基礎を培うことを踏まえて、一つ一つの体験が関連し、相互に結び付くことで、体験を深め広げ、体験の質を向上させていくことが必要です。

一方、児童期の教育では、学びや発達は連続していることを意識し、幼児期の指導や様々な体験を踏まえて、幼児期に培われた創造的な思考や主体的な生活態度をさらにはぐくんでいくことが必要です。

そこで、本県では、幼児期と児童期の子どもの発達の特質や双方の指導方法の違い、発達や学びの連続性から見る教育の連続性・一貫性について共通理解し、体験の質の向上を図るための指導内容や指導方法の工夫改善を目的とする実践研究を推進してきました。

本冊子は、この研究の成果のまとめとして、幼児期と児童期の円滑な接続の一つの方策を示したものです。幼児教育機関と小学校においては、冊子を研修等で活用し、幼児期と児童期の円滑な接続が一層推進されるよう心から願っています。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご協力をいただいた学びの基礎力向上推進委員会及び実践協力校園の皆様に深く感謝を申し上げます。

平成26(2014)年3月

兵庫県教育委員会

も く じ

I 幼児期と児童期の「学び」の接続の推進にあたって

1 幼児期の教育と児童期の教育・・・・・・・・・・・・・・・・	1
(1) 幼児期の教育	
(2) 児童期の教育	
(3) 幼児期の教育と児童期の教育の比較	
2 幼児期と児童期の教育のつながり・・・・・・・・・・	2
3 学びの基礎力の育成・・・・・・・・・・・・・・・・	3
(1) 幼児期における学びの芽生え	
(2) 体験の多様性と関連性	
(3) 幼児期から児童期にかけて（接続期）育てたい学びの基礎力	

II 研究の進め方

1 3つの視点・・・・・・・・・・・・・・・・	5
2 相互参観・・・・・・・・・・・・・・・・	5
3 事例の見方・・・・・・・・・・・・・・・・	6

III 事例

視点 自己を調整しようとする力	
事例1-1「なんで並んでくれへんの」・・・・・・・・	7
事例1-2「生活 あきってきもちがいいね」・・・・・・・・	8
事例2-1「順番守ってほしい！」・・・・・・・・	9
事例2-2「体育 ボール運動」・・・・・・・・	10
視点 考えようとする力	
事例3-1「ドングリごまを長く回したい」・・・・・・・・	11
事例3-2「算数 おおきさくらべ」・・・・・・・・	12
事例4-1「もっと高く積もう」・・・・・・・・	13
事例4-2「道徳 2わのことり」・・・・・・・・	14
視点 伝え合おうとする力	
事例5-1「ドングリが詰まって転がらない」・・・・・・・・	15
事例5-2「国語 じどう車くらべ」・・・・・・・・	16
事例6-1「手裏剣遊びがおもしろい」・・・・・・・・	17
事例6-2「道徳 どこんじょう だいこんの大ちゃん」・・・・・・・・	18

IV 実践から明らかになったこと

1 「学びの基礎力の育成」のための指導内容・指導方法の工夫・・・・・・・・	19
2 幼児期から児童期に培われる学びの基礎力・・・・・・・・	21

I 幼児期と児童期の「学び」の接続の推進にあたって

1 幼児期の教育と児童期の教育

(1) 幼児期の教育（幼稚園、保育所、認定こども園における教育）

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っており、幼児期の発達の特性に照らして幼児の自発的な活動を重視し、教育課程・保育課程を編成し、教師が意図的・計画的な指導を「環境を通して」行っている。

また、遊びを通して身体感覚を伴う多様な活動を経験することによって、豊かな感性を養うとともに、生涯にわたる学習意欲や学習態度の基礎となる好奇心や探究心を培い、また小学校以降における教科の内容等について実感を伴って深く理解できることにつながる「学びの芽生え」をはぐくんでいる。

(2) 児童期の教育（小学校における教育）

児童期の教育は、義務教育のうち基礎的なものを施すものであり、「人間として調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童の心身の発達段階や特性を十分考慮して」編成された教育課程のもと、計画的な指導を「教科書」を通して行い、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図っている。

また、教科学習や道徳教育、特別活動などを通して、知・徳・体のバランスのとれた教育を展開し、豊かな人間性とたくましい体をはぐくむとともに、児童が自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」をはぐくんでいる。

(3) 幼児期の教育と児童期の教育の比較

	幼児期の教育	児童期の教育
教育課程の基準	幼稚園教育要領・保育所保育指針	小学校学習指導要領
	健康・人間関係・環境・言葉・表現	国語・社会・算数・理科・生活・音楽・ 図画工作・家庭・体育・道徳・外国語 活動・総合的な学習の時間・特別活動
教育課程の 構成原理	経験カリキュラム （一人一人の生活や経験を重視）	教科カリキュラム （学問の体系を重視）
	方向目標 （その後の教育の方向付けを重視）	到達目標 （具体的な目標への到達を重視）
教育の方法等	遊びを通した総合的な指導	教科等の目標・内容に沿って選択された教材による指導
学びの形態	学びの芽生え（無自覚な学び） 学ぶことを意識していないが、楽しい こと好きなことに集中することを通 じて、様々なことを学んでいくこと	自覚的な学び 学ぶことについての意識があり、与え られた課題を自分の課題として受け 止め、計画的に学習を進めていくこと

2 幼児期と児童期の教育のつながり

幼児期の教育と児童期の教育については、遊び中心と教科中心という教育方法の違いはあるものの、子どもの「発達」や「学び」は連続している。

平成22年に文部科学省から出された「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」では、幼小連携について「子どもの発達や学びの連続性を保障するため、幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続し、体系的な教育が組織的に行われること」が重要であるとして、幼小間のカリキュラムの接続に踏み込んだ「新たな幼小連携」の必要性が示されている。

そこで、幼児期の教育と児童期の教育の円滑な接続を進めるため、この「発達」や「学び」に着目した教育のつながりを明らかにし、学校教育の目標である「生きる力」の育成のための教育課程・教育活動を考えていくことが必要である。

幼児期と児童期の教育の連続性・一貫性

- ・ 幼児期と児童期の教育の目的・目標（教育の基本事項《知・徳・体》）は、教育基本法や学校教育法において連続性・一貫性をもって構成されている。
- ・ 幼児期と児童期の教育の目標を「学びの基礎力（教育の基本事項《知・徳・体》）の育成」と捉える。



幼児期と児童期の教育活動をつなぐために

- ・ 互いの教育について理解するとともに、幼児期においては、今の学びがどのように育っていくのか、児童期においては、今の学びがどのように育ってきたのか見通す。
- ・ 幼小を通した「学びの基礎力の育成」を図るために、幼児期の終わりから児童期にかけて、「3つの自立」（学びの自立、生活上の自立、精神的な自立）を育成する。また、児童期においては、「学力の3つの要素」（基礎的な知識・技能、問題解決のために必要な思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度）を育成する。
- ・ 学びの芽生え（無自覚な学び）から自覚的な学びへ円滑に移行できるよう、発達の段階を考慮し、「人とのかかわり」「ものとのかかわり」という、直接的・具体的な対象とのかかわりを通して教育活動を進める。

Point 円滑な接続のために

- * 双方の教育内容だけでなく、教育目標、教育課程、特色ある活動などについて相互理解を深める。
- * 教育実践を参観し合い、具体的な子どもの姿や教師の指導について協議を行うとともに、子どもの姿を見取る視点などについても理解を深める。
- * 幼児期から児童期にかけて、人やものに興味をもち、かかわる中で様々なことに気付くとともに、それを深め、広げていく過程の中で、自己発揮と自己抑制を調整する力を培う。

3 学びの基礎力の育成

(1) 幼児期における学びの芽生え

学びの芽生えとは、学ぶことを意識しているわけではないが、楽しいことや好きなことに集中することを通して、様々なことを学んでいくことであり、幼児期の遊びがこれに当たる。自発的活動としての遊びは、幼児期特有の学習である。

幼児期においては、健康、人間関係、環境、言葉、表現からなる5領域において、心情（豊かな心情、共感する心情）、意欲（わきあがる意欲、共通の目的に向う意欲）、態度（自立しようとする態度、協力する態度）をはぐくむことを目標とし、様々な体験を通して生きる力の基礎となる力を培っている。

～遊びは幼児期にふさわしい学び～

「宝箱にこの包装紙をきれいに貼りたい」



どうすれば、箱の大きさにあった紙が切れるかな？切っては貼り、貼ってははがしを繰り返すうちに、紙を箱に重ねて切ればいいことに気付いた。

「Aちゃん、ここ、もっててくれる？」
「いいよ」

試行錯誤の末、箱の形に合った紙を切ることができた。

- <このようなことを学んでいる>
- ・納得のいく方法が見つかるまで根気よく試す。
 - ・物を重ねて測る方法に気付く。
 - ・一人でできないことを友達に頼む。
 - ・目的を達成した充実感を味わう。

(2) 体験の多様性と関連性

このように、幼児は環境に主体的にかかわり、様々なことを学んでいく。そして、その学びは次の体験とつながり、体験と体験が関連していく。これは体験の深まりであり、広がりである。

学びの基礎力は、多様な体験が関連していく中ではぐくまれていく。

幼児期においては、幼児の体験が関連性をもつものになっていくよう、教師は次のことに留意することが大切である。

- 1 体験に目を向ける。
- 2 幼児の体験に共感する。
- 3 体験からどのような興味や関心をもったか理解し、適切な援助をする。
- 4 体験から幼児が何を学んだかを理解する。

(3) 幼児期から児童期にかけて（接続期）育てたい学びの基礎力

「接続期」は、学びの基礎力の育成期間である幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間である。幼児期の教育から児童期の教育への準備期間や慣れの期間ではなく、子どもの発達や学びの連続性を踏まえて「接続期」を捉えることが必要である。このことから、各学校園の実態に応じて適切な期間を設定し工夫していくことが必要である。

幼児期の教育では、「幼児期の終わりまでに育って欲しい幼児の姿（※１）」を参考にしながら、幼児の発達等の状況に応じて、具体的な姿をイメージし、学びの芽生えから自覚的に学ぶ意識へとつながっていくよう、教育活動を進める。このとき、「３つの自立（※２）」につながるよう、意識していくことが大切である。

そして、幼児期の終わりから児童期にかけて、今までに学んできたことを基に、自己発揮と自己抑制を調整する力をさらにはぐくみ、学びの基礎力を高めていく。

また、児童期の教育では、子どもの発達や学びを確認しつつ、教育活動全体を通して、学ぶ力、かかわる力、生活する力（３つの自立）を養い、学びの基礎力を高めていく。このとき、子どもの主体的な活動の中で自覚的な学びの確立を図るとともに、学ぶ意欲を育てていくことが大切である。

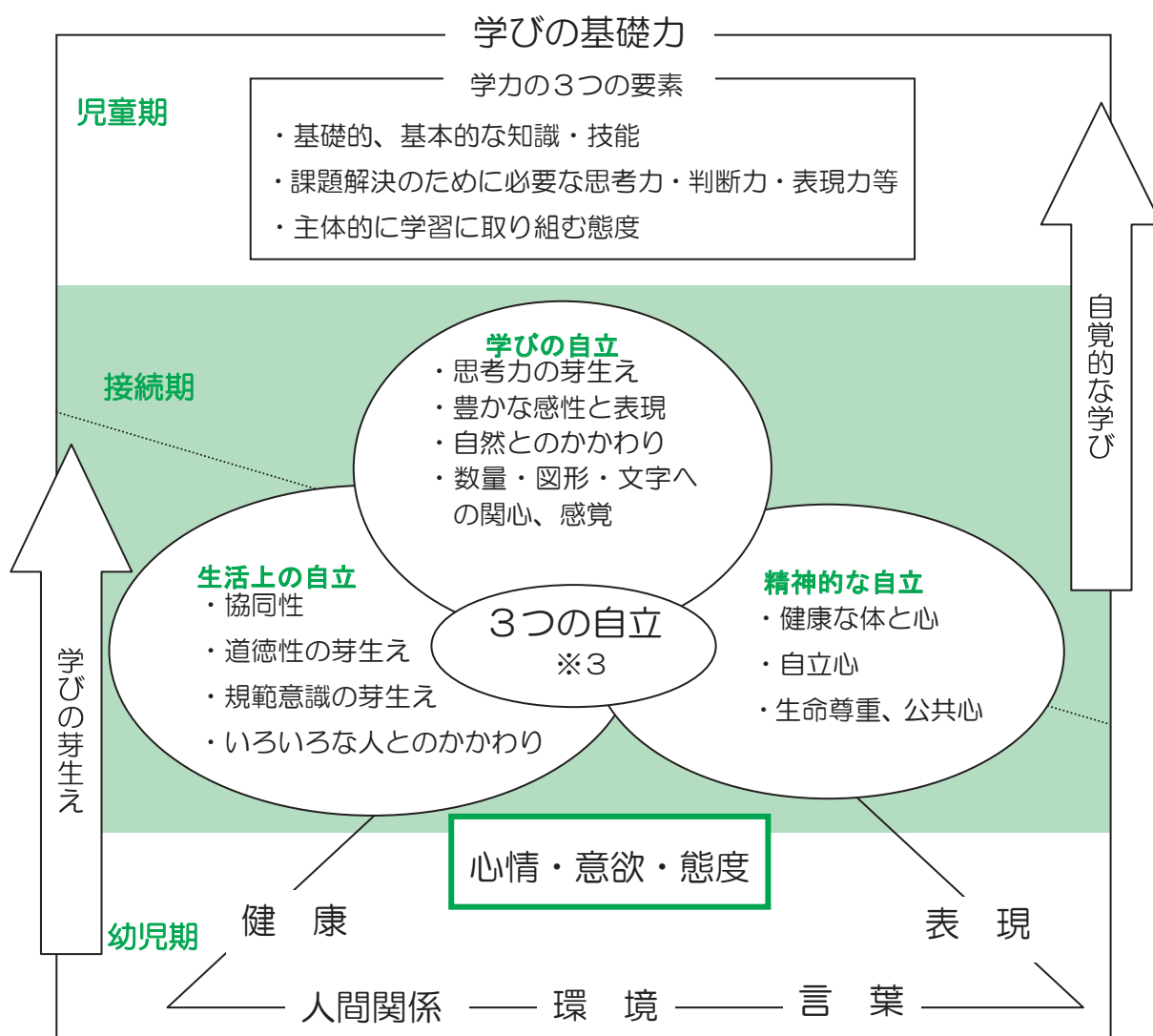


図1 幼児期から児童期の3つの自立との関連

（※１） 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」において示された幼児期の終わりまでに育って欲しい幼児の姿。

・健康な心と体 ・自立心 ・協同性 ・道徳性の芽生え ・規範意識の芽生え ・思考力の芽生え
 ・いろいろな人とのかかわり ・思考力の芽生え ・自然とのかかわり ・生命尊重、公共心
 ・数量、図形、文字等への関心、感覚 ・言葉による伝え合い ・豊かな感性と表現

（※２） 「３つの自立」とは

- ＜学びの自立＞ 学ぶ力
- ＜生活上の自立＞ かかわる力
- ＜精神的な自立＞ 生活する力

（※３） 幼児期の終わりまでに育って欲しい幼児の姿を、「３つの自立」の視点で分類している。

Ⅱ 研究の進め方

1 3つの視点

本研究では、学びの基礎力の育成を図るための指導内容・指導方法の工夫について実践研究を進めるにあたって、下記の3つの力を視点としている。

＜3つの視点＞

・ 自己を調整しようとする力

人やものに興味や関心をもち、かかわる中で様々なことに気付くとともに、それらを深め、広げていく過程で、自己発揮と自己抑制を調整しようとする力。

・ 考えようとする力

自分にとって興味・関心がある活動に進んで取り組み、試行錯誤を繰り返しながら、活動に必要なことを獲得し、次の体験につなげていこうとする力。

・ 伝え合おうとする力

人やものに興味や関心をもち、かかわる中で様々なことに気付いたり感じたことを、人に伝えたり、人の話などをよく聞いたりして、自分の考えを深め、自分の思いや考えを適切な方法で表現しようとする力。

2 相互参観

本研究では、相互参観を通して、互いの教育や指導方法の共通点、相違点を共通理解するとともに、幼児期においては、今の学びがどのように育っていくのか、児童期においては、今の学習がどのように育ってきたのか見通し、学びの基礎力の育成を図る体験の連続性・一貫性を明らかにしている。

また、学びの基礎力を育成する体験の質を高めるための教育内容・指導方法の工夫改善を進める。

幼児期の教育について

事前研修

・・・保育参観までの遊びの過程やその中での学び、さらに、この時期にはぐくみたい視点の力につながる学びについて共通理解する。



保育参観

・・・視点につながる学びが、どのようににはぐくまれているかという視点で参観する。また、小学校関係者は、環境の構成や教師の援助の意図、幼児の遊びの見方、学びの見取り方について説明を受けながら参観する。



事後研修

・・・参観から見取った環境の構成や教師の援助の在り方、学びについて双方の立場から協議し、見取った学びが小学校入学までに深まるであろう学びについて確認する。



入学までにはぐくまれた学びを受け、さらに小学校で深めていきたい方向を確認する。

児童期の教育について

授業参観



事後研修

・・・幼児期からつながった学びを、さらに深める指導内容・指導方法を工夫した授業を参観し、学びがどのようなにはぐくまれているか捉える。また、幼児教育関係者は、幼児期にはぐくまれた学びが、児童期の教育にどのようにつながっているか、という視点で参観する。

・・・児童の学習に向かう姿からどのような学びがあったか協議し、学びにつながる指導の工夫について確認する。また、児童期にはぐくまれる学びから、幼児期からつながっていく学びを見通し、幼児期ではぐくむ学びの指導の工夫を検討する。

Point



工夫した指導内容・指導方法の成果と課題を次回の保育・授業に活かすとともに、接続のポイントを明らかにする。

3 事例の見方

1 事例 幼稚園

本研究では、接続期を協同的な学びが可能となる5歳児から、発達や学びのつながりを考慮し、ゆったりとした流れの中で双方共通の教育目標が達成できるよう、1年生終了までの2年間と捉えている。

事例では、各園の教育課程で位置付けられた具体的な幼児の姿を基に、指導の方向を示している。また、主体的な活動の中で「学びの芽生え」をはぐくむ幼児の姿をまとめ、「学び」につながる姿を下線で示している。さらに、視点の力につながる「学び」をはぐくむための援助を、教師の援助のポイントとしてまとめている。

2 小学校へつながる学び

事例から確認した「学び」と、その学びが多様な経験を積み重ねることで、小学校入学までに育てほしい「学び」を、「小学校へつながる学びの基礎力」として記載している。（各園の教育課程に基づいた幼稚園終了までに育てたい姿に基づいている。）

3 事例 小学校

小学校では、幼児期からつながる「学びの基礎力」を受け、接続期に育てたい児童の姿を基に、授業ではぐくむ「学びの基礎力」、そのための指導の方向を指導のポイントとして明らかにし、工夫した取組による児童の姿をまとめ、指導の工夫を下線で示している。

学びの基礎力の育成は、児童期の生活や学習を通して行われるものである。幼稚園の活動が教科につながるのではなく、幼稚園ではぐくんだ心情、意欲、態度が小学校における生活や学習の基盤となる、関心、意欲、態度につながる。

4 接続のポイント

学びの接続は、幼児期・児童期それぞれの教育を補うものではない。接続のポイントは、それぞれの時期に育てたい姿をはぐくむために必要な手立てを示したものである。



Ⅲ 事例

視点：自己を調整しようとする力

事例１－１ 幼稚園

３年保育５歳児 １１月

１ この時期に目指す幼児の姿

友達とイメージを膨らませながら意欲的に遊びを進めようとする。

２ 「自己を調整しようとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫

店番と他の店で遊ぶ順番を決め、互いの店を行き来する中で、いろいろな考えがあることに気づき、友達の考えが分かって、さらに遊びを工夫して進められるようにする。

３ 事例 「なんで並んでくれへんの」 ※下線は学びにつながる姿

ねらい 遊びに必要なルールを考え、工夫して伝えようとする。

ドングリゲームのスタートの場所と、順番を待つ場所を決めていたＡ児とＢ児だったが、自分たちが考えていた場所とは違う場所で並んでいたＣ児とＢ児が言い合いになる。

「どうした？何かあった？」と教師が聞くと、「Ａちゃん、させてくれへん。」とＣ児たちが口々に教師に訴えてくる。Ｂ児は、「順番くるまでここで待たなあかんのや。」と受付を指さし、Ａ児も大きく頷いて、「みんな、なんで並んでくれへんの！」と頬を膨らませて、その場に座り込む。「僕、並んどったで！」と反論するＣ児。教師がそれぞれの言葉に頷き、「そっか、並ぶ場所が違ったんやね。でも、どうして受付の所にみんな並ばないのかな？」と言うと、Ｃ児「だって知らなかった。」

Ｂ児「受付のところに、『ここに並んで』って書いてあるやろ。」

Ｄ児「その看板、上向いて見えへん。それに字だけやったら、ちっちゃい組さん分からんで!!」

Ｂ児「あっ！ほんまや。」と看板を直しはじめると、Ａ児も立ち上がり「小さい組さんにも分かるように、『ここで止まります』って、印つけるわ。」とカラーテープを準備する。するとＢ児が「ここで待って下さいって、僕、言うわ！」と答える。そして、「次に行く所が分かるように矢印も、貼っとこか。」と、２人で話しながらカラーテープを貼った。

４ 教師の援助のポイント

- ・ 互いの思いに気付けるよう、教師は中立の立場で子どもたちの話を聞き、整理する。
- ・ 友達の話が分かり、友達の意見を納得して受け入れられるよう、話し合える時間を十分にとる。
- ・ 遊びのルールが分かりやすいように、その伝え方を工夫しようとする姿を認める。



５ 小学校へつながる学びの基礎力

この事例から見取った学び	→	小学校へつながる学びの基礎力
自分の思ったことを素直に表現する。		・ 互いの思いを伝え合いながら、分かり合って遊びを進める。
友達の考えに共感し、友達と協力して遊びを進める。	→	・ きまりの大切さに気づき、守ろうとする。

１ 「自己を調整しようとする力」につながる学びの基礎力

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
互いの思いを伝え合いながら、分かり合って遊びを進める。	→	友達と協力し、自分たちの生活を楽しむ方法を工夫する。

２ 事例 【生活 「あきってきもちがいいね」】

本時の目標 : パーティーを工夫して進めたり、自分の思いを伝えたりして、みんなと協力して楽しむことができる。

指導のポイント : 友達と相談したり、協力したりしやすい人数のグループを構成し、自分たちの手で、思いを実現させていけるようにする。

活動している様子 ※下線は指導の工夫

待ちに待ったパーティーの日、グループごとに出し物を宣伝する（30秒間コマーシャル）時間をつくった。子どもたちは、グループで相談し、一人一人の台詞を決めて、前に出てプレゼンテーションをした。自分たちが創り上げてきたことを言葉にしてまとめ、人に伝えるということは、難しいと感じていたようだが、毎回、プレゼンが終わると、大きな拍手が湧いた。「さあ、いよいよ始まるよ！」「ようこそ！しぜんいろいろパーティー」と各々が声に出し、喜び勇んでグループの場所へと移動した。グループ内で、順番を決めて、店番をする児童と、他のグループを見て回る児童とに分かれたことで、全部のグループを回って楽しむことができた。

「落ち葉の影絵が始まるよ。」と声がかかり、みんなが２班のところに集まった。楽しみで興奮しており、「見えへん。」「前の人座って。」など、ざわついていると、３班のＡ児が、『静かに見てください。スクリーンをさわらないでください』って、看板に書いてあるやん。」と全体に注意を呼びかけた。「ほんまやわ。Ａちゃん、よく気が付いたね。すごいなあ。」と教師が声を掛けると、みんなも静かにその場で見ようとした。影絵を担当していた二人のうち、Ｂ児は、張り切ってその場を仕切ろうとした。もう一人のＣ児は、Ｂ児と一緒に落ち葉や木の実で作ったものを映し出し、考えた台本に合わせて、勇気を出して普段よりも大きな声で、台詞を言うことができた。ストーリーがみんなに伝わり、拍手をもらって笑顔を見せながら、「葉っぱが壊れないように作り直さんとあかん。」と２人顔を見合わせて、次の課題を見付けていた。

３ 考察

- ・ 小グループで活動を進めてきたことで、一人一人が仲間としてのつながりを感じ、協力しながら活動することができた。
- ・ 小グループや全体での話し合い活動を大切に、活動を振り返ることで、自分の思いを人に伝えたり、友達の思いを受け止めたりすることができるようになり、共通の目的に向かって、工夫したり協力したりすることの楽しさを味わう経験につなげていきたい。

接続のポイント

<幼稚園>

トラブルが起こった時に、互いの考えを伝え合うことで、いろいろな考えがあることに気づき、遊びに必要なルールが工夫できるようにする。

<小学校>

活動に応じたグループ構成を考え、自分たちで目的が実現できるようにする。



自信いっばいに品物の説明をする

事例2－1 幼稚園

2年保育5歳児 11月

1 この時期に目指す幼児の姿

友達の考えを受け入れながら、自分の考えも十分に出して遊び、園生活をしようとする。

2 「自己を調整しようとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫

自分たちで考えた双六を楽しむ中で、自分の気持ちを伝えたり、友達の気持ちを聞いたりしながら、友達の気持ちに寄り添って考えられるようにする。

3 事例 「順番守ってほしい！」 ※下線は学びにつながる姿 ねらい 自分たちで考えたルールを守りながら、双六を進める。

双六で遊んでいたA児は、『1回休み』になった。そこで1回休み、1巡したので、今度は自分の番だと思っていたが、隣のB児がサイコロを振りだした。

A児は「えっ？」と首を横に傾けながら何も言えずにいる。他児もそのことに気付いていない。

「Aさん何か言いたいことはないのかな？」と教師がそばで小さな声で尋ねたが「う～ん。」と言うだけで、今にも泣きそうな顔で友達の方をじっと見ている。

その様子に気付いたC児が「Aちゃん どうしたん？」とA児の顔を下からのぞき込むようにして声を掛ける。

我慢していたA児が「あんな、何でAが1回休んだのにサイコロまわってこうへんの？」とやっと涙声で言う。

すると、サイコロの手を止めてD児が「え～ Aちゃんやってなかったん？」と驚いた様子で尋ねる。周りの子も「Aちゃん、ごめん！」と謝りながらサイコロをA児に手渡した。A児は「いいよ、でも順番は決めたし、守って！」とみんなに聞こえるような大きな声で言った。

するとD児が「もう1回、みんなで順番確認したらいいね。」「うん、そうしよう。」と順番を確認し始めた。そして、「次は、Aちゃん。」と名前を呼び合いながら、もう一度双六遊びが始まった。

4 教師の援助のポイント

- ・ 困っている友達に気付けるよう、遊びの様子を見守りながら必要な援助をする。
- ・ 自信をもって自分の思いを伝えられるよう、一人一人の意見に頷き、共感する。
- ・ A児の気持ちに気づき、気持ちに寄り添って考えようとする姿を認める。



5 小学校へつなげる学びの基礎力

この事例から見取った学び		小学校へつなげる学びの基礎力
友達の困っていることに気づき、相手の気持ちに寄り添おうとする。	→	互いの思いを伝え合いながら、分かり合って遊びを進める。
自分の気持ちを言葉で伝える。		
遊びが楽しく進められる方法を工夫する。	→	きまりの大切さに気づき守ろうとする。

事例2-2 小学校

1 「自己を調整しようとする力」につながる「学びの基礎力」

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
互いの思いを伝え合いながら、分かり合って遊びを進める。	→	相手の気持ちを大切に考えながら行動する。

2 事例 【体育 「ボール運動」】

本時の目標 : チームで勝つための作戦を考え、それを試合に活かすための練習ができる。
 指導のポイント : チームごとに作戦タイムの時間をもつことで、チーム全員(少人数)で協力して考えたり、練習したりできるようにする。

活動している様子 ※下線は指導の工夫

小学生になり、ボールを使った初めての攻防ゲーム。3チームに分かれ、“勝つための作戦を考える”ことを大きな柱とし、取り組んだ。試合前の10分間、チームごとに作戦を確認し、実際にその作戦を使った“作戦タイム”で、Aチームからはきつい言葉ばかりが聞こえてきた。「ちゃんとやろうや！」とH児。それに対して、チームに与えられた1つのボールを独占し、好きな遊びに熱中してH児の言葉を聞こうとしないN児。その日は、Aチームに1人欠席者がおり、勝つためには作戦が不可欠だということを感じていたH児にとって、他チームが協力し、様々な作戦を実践している様子からは、大きな焦りを感じていたようだ。自分たちで解決できるよう、様子を見守り、ラストの時間を知らせた「後2分！」という声と共に涙を浮かべたH児。それを見たN児は、少し困った表情でボールをH児に手渡したが、「全然練習できなかったやん。」の一言。試合が始まると、前回までの反省を生かした作戦や他チームの作戦を取り入れて、大きな声援で盛り上がるB・Cチームに対し、暗い表情をしたAチーム。結果は、Aチームが最下位。体育館から帰りながらH児は「ちゃんと作戦タイムに練習したら勝てたかもしれんやん。」とN児に思いを訴えると、「ごめん。」と謝るN児。次の体育の時間、作戦タイムになると、勢いよくボールを手に「やろ！」とN児。H児は嬉しそうに満面の笑みを浮かべ、Aチームからも「もっと遠くに蹴ったらいいんとちゃう？」「ボール蹴って、すぐに走る練習しとく？」と具体的な作戦の言葉が飛び交っている。試合結果は、2位。それでも、最後の振り返りタイムで「この前は、Nくんがふざけて、全然作戦タイムに練習できなかったけど、今日はちゃんとできまし、2位になれてうれしかったです。」とH児。それを聞いたN児は、照れながら「Hちゃんががんばってて、ぼくもがんばらなあかんって思いました。ちゃんと練習したら勝てるんやって分かったし、うれしかったです。」と発表した。

3 考察

- ・ 少人数での活動が、お互いの思いや頑張りに気付かせ、互いを思いやる気持ちにつながった。
- ・ 様々な活動を通して、きまりを守ることの大切さに気付かせ、それに伴って自分の意見を述べたり、調整したりする活動を充実させる必要がある。

接続のポイント

<幼稚園>

友達の気持ちを大切に考えながら行動できるよう、友達の気持ちに気付けるようにする。

<小学校>

一人一人がチームの一員という意識がもてるような人数のチーム編成を工夫する。

事例3-1 幼稚園

2年保育5歳児 10月

1 この時期に目指す幼児の姿

共通の課題について友達と話し合い、協力して遊ぼうとする。

2 「考えようとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫

身近な秋の自然物に興味をもって遊びに取り入れる中で、遊びの目的を実現できるよう、友達の工夫に気付いたり、友達と一緒に試したりできるようにする。

3 事例 「ドングリごまを長く回したい」 ※下線は学びにつながる姿

ねらい ドングリごまが長く回るよう、友達に聞いたり、根気よく試したりする。

ドングリごまを、こま板の上で回そうとするが、すぐにドングリは横に倒れて回転し、止まってしまうか、不規則に回転して板の外に出てしまう。ところがA児のドングリごまは、一所で止まったように回り続けている。「すごい！Aちゃんのだけ、じっとしてる。」と声があがる。教師も「Aちゃんすごいね。どうやって回してるのかな。」と声を掛けると、A児は皆が見つめる中、ドングリごまを回して見せる。「僕と持ち方が違う。」「分かった！手の先を少し広げるんや！」「ドングリに手が重なってた！」と、それぞれに自分の思ったことを話しては、自分のドングリごまを回し始める。ところが、「いくらやってもまっすぐ回されへん。」「こま板から飛び出してしまうわ。」と、手が止まってくる。その時、「これを並べてガードしよう！」とB児がドミノの入ったかごを持ってくる。「それいいな。」と、B児と一緒にこま板の端に沿ってドミノを並べた。ドングリごまを回すとドミノに当たり、ドミノがぐにゃっと曲がったが、板からはみ出さず回り続けている。

子どもたちは、ドミノがぐにゃっと曲がったことにげらげら大笑いしながら、「ドミノに当たったら、ビリビリ光線、ってことな！」「そうやな。」「ビリビリ光線になったら、ここで1回休みにしよう！」「それいいな。」と、新しい遊びのルールを考え、ドングリごま回しを楽しんだ。

4 教師の援助のポイント

- ・ 自分たちで長く回せる方法が工夫できるよう、A児のドングリごまのすごさに共感し、どうしたら長く回せるか気付けるようにする。
- ・ こまを長く回したいという思いを受け止め、その思いが実現できるよう気持ちを支える。
- ・ 友達と考えを出し合って遊ぶ楽しさが味わえるよう、幼児の柔軟な発想に共感する。



5 小学校へつなげる学びの基礎力

この事例から見取った学び		小学校へつなげる学びの基礎力
友達の工夫に気づき、自分との違いが分かる。	→	友達の考えを取り入れて、工夫しながら遊びを進める。
目的を実現するための方法を根気よく試す。	→	目的を実現する方法を、今までの経験から予想して試す。

1 「考えようとする力」につながる学びの基礎力

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
目的を実現する方法を、今までの経験から予想して試す。	→	今までの経験を生かして、目的が達成できそうな用具を選び、比べ方を工夫する。

2 事例 【算数 「おおきさくらべ」】

本時の目標 : ・「長さ比べ」という活動に興味と関心をもつ。
・どちらが長いか予想し、比べる方法を考える。

指導のポイント : ・「たぬきときつねの世界」を設定し、興味、関心をもたせる。
・課題の縮小版プリントを配布し、一人一人が自分の考えを試し、さらに考えることができやすいようにする。

活動している様子 ※下線は指導の工夫

たぬきときつねがしっぽの長さでもめているという設定に、「しっぽの長さを昨日みたいに調べたらいい。」「比べたい。」と、本時の課題に興味津々である。さらに、「太いのが短くて、細いのが長い。」という意見に対して、「関係ないやん。」とつぶやくA児。それを教師が「どういうことだろう。」と尋ねると、「太さじゃなくて、長さやで。」というB児の意見が出る。「今日は、太さ比べじゃなくて、長さ比べだね。」と教師が本時の課題を確認すると、みんな納得して頷いた。

グループ活動では、課題の縮小版プリントを使って、紙を重ねてすかしてみたり、鉛筆や消しゴム、指などを使って比べ始める。E児は、数図ブロックを用いている友達からヒントをもらっている。だが、どう比べればいいのか戸惑っていたが、前で他の児童が発表するのを見て理解し始め、「1、2・・・6個。」と数図ブロックを数え始めた。

一人で試したり、グループの友達の比べ方を見てヒントを得たり、友達に教えたり、教えてもらったりしながら、グループ内で自分が解決した答えを伝え合っている。

3 考察

- ・ 「たぬきときつねの世界」の設定が、小学校 1 年の成長段階に合致しており、興味をもち、自分の課題として意欲的に取り組むことができていた。
- ・ 縮小版プリントを用いて試行錯誤できていた。理解しづらい児童は、班の友達を見たり、発表を聞いたりして、少しずつ理解できていた。



接続のポイント

<幼稚園>

友達と一緒に遊びが工夫できるよう、幼児の思いに共感し、幼児の発想を柔軟に受け止めていく。

<小学校>

児童が「やってみたい」と思える、発達段階に応じた授業導入や教材を工夫する。



ワークシートを使って比べ方を工夫する

事例4－1 幼稚園

2年保育5歳児 9月

1 この時期に目指す幼児の姿

友達と力を合わせて遊びを進めようとする。

2 「考えようとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫

身近にあった箱を使って遊ぶことに興味をもち、友達と一緒にいろいろな形や大きさの箱を工夫して積み上げようとする中で、互いの考えを伝え合ったり、試したり工夫したりできるようにする。

3 事例 「もっと高く積もう」 ※下線は学びにつながる姿

ねらい 箱を高く積み重ねられるよう、友達と考えを出し合ったり試したり工夫したりする。

いろいろな形の箱を積み重ねて遊んでいるうちに、どっちが高く積めるか競い始めた。しばらくして、相手チームが縦長の箱を載せたことで、いっきに相手チームが優勢になった。このことに気付いたA児が、細長い棒状の箱を見付け、箱の上に載せてみるがすぐに倒れてしまった。A児は、「細すぎるな。」とつぶやいたまま箱を見ている。そこで、教師が「どうしたら倒れないのかな」と声を掛けると、同じチームのB児が牛乳パックを持ってきて、「ここにつけよう。」と、箱の下を指さした。「ええ考えやな。」「やってみよう。」と、A児と一緒に牛乳パックを箱の左右につけた。それを見ていた他の幼児が「もっとつけよう。」と、4面に牛乳パックをつけ床に置いてみると、安定して立った。相手チームは、既に自力では載せることができない高さまで箱を重ねている。それを見ながら、「これ載せたら勝てるで。」と笑顔で顔を見合わせている。両チームとも、A児が箱を載せるのをじっと見つめている。そんな中、A児がそっと箱から手を離すと、「やったー!」と、A児のチームから大歓声があがり、わずかな差だったが、高く積み上げることができたことを喜び合った。

4 教師の援助のポイント

- ・ 友達と一緒に問題が解決できるよう、A児の困っていることに気付けるようにする。
- ・ 考えを出し合ったり、考えたことを試したりできる時間を十分にもち、試す楽しさが味わえるようにする。
- ・ 遊びの目的が達成できた喜びが、「またやりたい」という意欲や問題を解決しようとする探究心につながるようにする。



5 小学校へつながる学び基礎力

この事例から見取った学び		小学校へつながる学びの基礎力
箱の大きさや積み方によって、高さに違いが出ることに気付く。	→	目的に合った形、大きさ、長さのものを選ぶ。
友達に自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら、遊びを進める。	→	相手の考えが分かり、考えを受け入れたり、まとめたりする。
友達と力を合わせて目的を達成することができた満足感を味わう。	→	クラス単位で協力し合いながら遊びを進める充実感を味わう。

事例4-2 小学校

1年生 10月

1 「考えようとする力」につながる学びの基礎力

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
相手の考えが分かり、考えを受け入れたり、まとめたりする。	→	相手の思いに気づき、相手を思いやる気持ちをもつ。

2 事例 【道徳 「2わのことり」】

本時の目標 : 友達のことを思い、やまがらのところへ飛んでいくみそさざいの心情を考えることを通して、相手を思いやり、友達を大切にしようとする道徳的心情を育てる。

指導のポイント : 話の内容をより理解しやすいように、イメージしやすい紙芝居や場面ごとの絵などを掲示する。

活動している様子 ※下線は指導の工夫

教師の周りに集まり、教師が読み聞かせる紙芝居を黙って見入っている。終わると、それまで集中していた緊張感が一瞬途切れるが、イスに戻るとすぐに教師の方を見て、教師の話を聞こうとする。

教師の「誕生日はどんなことをしますか。」という発問に対して、すぐに数人の児童が手を挙げ、それぞれに自分の経験したことのある誕生日の話始める。教師は、一人一人の意見に「そうなの。」「そんなことしてもらったんやね。」など、意見を受け止める。その度に手を挙げる児童が増え、まだ友達が発表していない意見を発表する。一人一人に応じた教師の共感の言葉に、児童は笑顔になっていく。

話の内容に興味をもったところで、本題に入り、「どうしてウグイスの家にいったのでしょうか。」という発問で、一瞬子どもたちが黙り手が挙がらなくなった。そこで、教師が新たに提示したウグイスの家の様子の絵を提示し、「絵を見て考えてもいいよ。」と声を掛けると、手を挙げて絵から感じたこと、思ったことを話し始めた。気持ちに寄り添う場面でも、その場面の絵を提示すると、そこからイメージした考えを発表したり、経験を重ねた思いを発表したりする。

話し合いの後のワークシートに、「やまがらは、悲しくて泣いているんじゃないか。だめだ、全速力で飛んで行かなくちゃ。」「一人ぼっちだもん。」「早く行かないと待っている。」「みんなも呼んできたらかった。」「行かなかったら心が冷たくなりそう。」「心配だ、急いで行こう。」「一人ぼっちにさせたくない。」など、やまがらの気持ちを思いやる、それぞれの考えを書いていた。

3 考察

- ・ 発達段階を踏まえ、教材教具を工夫し考えるポイントを分かりやすく示したことで、自分の思いを素直な言葉で表現することができた。
- ・ 一人一人の考えに教師が共感することで、受け入れられる心地よさ、安心感から、一生懸命考えようとする姿につながった。
- ・ どのような場面で考える必要感を感じるのか、その場面をしっかりと捉えていくことが必要である。



手作り紙芝居を見る子どもたち

接続のポイント

<幼稚園>

目的を達成するために、考えを伝え合ったり試したりできる時間を十分に確保する。

<小学校>

児童の発達段階の特性を踏まえ、視覚的な教材の工夫や、一人一人の思いに共感するなど、考える楽しさが味わえるようにする。

事例5-1 幼稚園

2年保育5歳児 11月

1 この時期に目指す幼児の姿

仲間とのつながりを感じながら、自分たちで遊びを進めていこうとする。

2 「伝え合おうとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫

「未就園児に楽しく遊んでもらいたい」という願いから、修理の方法を工夫する中で、友達と考えを出し合ったり、協力し合ったりできるようにする。

3 事例 「ドングリが詰まって転がらない」 ※下線は学びにつながる姿

ねらい 友達と一緒に考えを出し合いながら、修理の方法を考える。

ドングリころころゲームの筒の中に、ドングリが詰まって転がらなくなってしまった。

明日は、未就園児が遊びに来ることになっている。未就園児の子どもたちが楽しく遊べるよう、修理をすることになった。

ドングリころころゲームの場所に集まった子どもたちは、筒の中をのぞいたり、コースに触れたりしながら、ドングリがどこに詰まっているか探し始めた。すると、すぐに「コースを長くしたところで止まってる。」「坂の途中にも、ひっかかってる。」「ガムテープにくっついてる。」など、ドングリが詰まっている場所や、転がらなくなった原因に気が付き始めた。

すると、「つるつるにしないといけねいね。」という友達の意見を聞いて、つるつるになっているかコースを見始め、修理をはじめた。しばらくして、A児が「ここがあかん。」と筒に段差がついているところを指差している。上からガムテープを貼っても上手くいかず、どうしていいのかわからなくなったようだ。

そこで、一度ガムテープを全部はがし、最初からつなぎ直す方法を提案すると、A児は、はっとしたような表情で大きく頷き、ガムテープをはがし、そばにいた友達に、「ここ、もって。」と頼み、ガムテープでもう一度固定し始めた。

4 教師の援助のポイント

- ・ ドングリが転がらなくなった原因に気が付き、友達と一緒に問題解決できるよう、話し合いを見守る。
- ・ 友達同士で協力して進められるよう、A児の気づきを他の幼児も気付けるようにする。
- ・ 友達と力を合わせて、根気よく取り組み、目的を達成しようとする姿を認める。



5 小学校へつながる学び基礎力

この事例から見取った学び		小学校へつながる学びの基礎力
自分の気付いたこと、考えたことを友達に伝えたり、友達の考えを聞いたりする。	→	人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
楽しく遊べる方法を、工夫する。	→	友達と楽しく遊べるよう、友達と相談したり工夫したりする。

1 「伝え合おうとする力」につながる学びの基礎力

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。	→	相手を意識して自分の考えが伝わるように話したり、話を聞いたりする。

2 事例 【国語 「じどう車くらべ」】

本時の目標 : 自動車にはいろいろな種類があることを知り、学習の見通しをもつことができる。
指導のポイント : 家庭から持参した自動車等の模型を活用して、児童の経験している知識と結び付け、調べていこうとする意欲を高める。

活動している様子 ※下線は指導の工夫

家から持参したお気に入りの自動車を自由に紹介する。「ショベルカーです。工事のときに、ここで土をすくってトラックに乗せる仕事をしています。」「これはトラックです。荷物を運ぶ車です。」と模型を手にして発表したり、「ごみ収集車です。朝、ごみを集めています。」など自分の生活体験と重ねながら発表したりして、知っている自動車への記憶を呼び起こすことができた。なかには、身近では見るできない、バキュームカーやコンバインなどの紹介もあり、児童の生活体験の広さを垣間見た。ここで自動車への興味が高まった児童は、姿勢に気を付けながらしっかりと声で音読する姿が見られた。

次に、「どんなしごとをしていますか。」「どんなつくりになっていますか。」の文を読み取る学習へと進んだとき、自分の考えに自信がなく、教科書に線を引くことをためらっている児童がいた。隣の友達の様子を見ておぼろげながら線を引いた後、友達の発表内容を聞いたり、自分も声に出して発表したりして、しっかりと問いの文をつかむことができた。また、「しごと」と「つくり」の言葉の意味を日常の言葉で考えさせた。「しごと」は、働くこと、人を助けることをするという言葉でつながった。「つくり」では、黒板に掲示してある写真を利用して、「例えば、消防車はホースがついたりするのがつくりだと思います。」「ドアがついていたり、窓があったり、どんなふうに作っているかを表す言葉です。」と発表することができた。具体的な部分を示しながら発表することができていたので、難しいだろうと予想していた「つくり」の意味もつかむことができた。ただ、まだ十分に理解できていない児童もあり、次時からの一つ一つの自動車を調べていく学習のなかで、明確にしていくこととした。

3 考察

- ・ 互いの考えを聞き合う場面を多く取り入れたことで「伝え合う力」につながった。
- ・ 自分のお気に入りの物を用意したことで、伝えたい気持ちが高まった。
- ・ 模型等の実物や資料を用意することで、話す手立てとして活用することができた。
- ・ 話し合いの中で異なる考えが出てきた時には、まず相手の考えや思いを受け止めることを大切にさせる。また、自分が考えた根拠を示しながら発表することができるように、育てる必要がある。

接続のポイント

<幼稚園>

友達と協力して問題が解決できるよう、自分の考えを伝えたり、友達の考えが分かって自分の考えに取り入れたりできるようにする。

<小学校>

言葉だけで表現しきれない部分を、実物や絵などを使うことで、相手に分かりやすく伝えられるようにする。

事例6-1 幼稚園

2年保育5歳児 10月

1 この時期に目指す幼児の姿

友達と考えを出し合い、共通の目的に向かって遊びを進めようとする。

2 「伝え合おうとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫

自分で折れるようになったお気に入りの手裏剣を使って遊びながら、友達とかかわったり、遊びを工夫したりして、一緒に遊びを進める楽しさが味わえるようにする。

3 事例 「手裏剣遊びが面白い」 ※下線は学びにつながる姿

ねらい 友達と考えを出し合いながら、目的が実現できるよう遊びを工夫する。

自分で手裏剣を折れるようになった子どもたちが、2、3人で手裏剣を飛ばし合っていたが、体に当たったり、顔に当たったりすることが増えてきたので、「どんなふうに投げたらいいのかな。」と声を掛けてみた。

最初は「友達のいないところ。」と言って、空間を見付けて投げていたが、A児が「いいこと考えた。」と部屋に置いてあった箱を持ってきて、箱の底に的になる円をかき、箱を立てかけて的に向かって投げ始めた。そこへ他の幼児も「おもしろそうや。やらせて。」と、仲間に加わったが、なかなか的に当たらない。「これ低いから当たらんのかとちがうか。」「高くしたらいいやん。」「もう一つの箱の上に置いたらいいと思う。」と言って、箱を探してきた。

手裏剣が的に当たり始めると、手裏剣の投げ方やポーズを工夫し始めた。そのうち手裏剣の飛び方が違うことに気付いたA児が「Bちゃんの手裏剣、シュッって飛んでかっこええな。」と言うと、B児は「こうやるんで。」とスナップをきかせて投げて見せた。

他の幼児も「どうするん？」とそばに集まってくる。B児は、「こうやるんや。」と、スナップをきかせるところを4人に見せながら、手裏剣を投げる。「こうかな。」「えい！」と、B児の投げ方を真似しながら、手裏剣投げを楽しんだ。

4 教師の援助のポイント

- ・ 友達とかかわり、遊びを工夫できるよう、遊びに必要な用具や素材を幼児と一緒に用意する。
- ・ 友達の工夫に気付き、友達を認めたり友達の真似をしたりするかかわりを温かく見守る。
- ・ 友達の真似をしながら自分なりの工夫を見付けようとする姿を認める。



5 小学校へつながる学びの基礎力

この事例から見取った学び		小学校へつながる学びの基礎力
身近なものを使って遊びを工夫する。	→	友達の考えを取り入れながら、一緒に遊びを工夫して進めることを楽しむ。
友達の工夫に気付き、自分も真似てみようとする。		
思ったこと、考えたことを自分なりの方法で表現する。	→	思ったこと、考えたことを言葉で伝えようとする。

1 「伝え合おうとする力」につながる学びの基礎力

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
思ったこと、考えたことを言葉で伝えようとする。	→	人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。

2 事例 【道徳 「どこんじょうだいこんの大ちゃん」】

本時の目標 : 生命の力強さや尊さを感じ取り、大切にしていこうとする心情を育てる。

指導のポイント : 自分の思いが素直に表現できるよう、ペープサートを使ったり、ペアトークを取り入れたりする。

活動している様子 ※下線は指導の工夫

場面ごとの挿絵を見せながら、教師が読み聞かせる。

場面ごとに読むことで、場面の状況を捉えやすく、集中力も途切れず教師の発問や友達の意見を聴くことができています。

主人公の気持ちを考えるときは、実際に経験したことを引き合いに出して考えさせることで、自分なりの考えがしっかりと話し、より主人公の気持ちに近づくことができています。また、自分の思いをまとめて話すことができにくい児童にも、頷き、共感しながら、「〇〇ということだね。」と、言語化につながるようまとめることで、聞き手への理解につながっている。

「主人公がど根性大根の大ちゃんにどんな言葉を掛けてあげる」という活動では、ペアトークを取り入れ、二人に一つずつペープサートの「大ちゃん」を配る。児童は、受け取るとすぐにペープサートに「大ちゃん早く元気になってね。」と話し始めた。ペープサートに話しかける活動に心が動かされたようで、どの児童も主体的に活動している。中には、一人が話しかけると、相手の児童が大ちゃん役になって、「うん、がんばるよ。」と応えているペアがあった。

時間を十分にとることができたので、何回もやりとりをしているうちに、「どんどん大きくなって、赤ちゃんをうんでね。」というように、さまざまな考えが出てきた。また、全体の場では、発言できなかった児童も、友達と何度もやりとりを続けることができていた。

3 考察

- ・ 自分の考えを伝える手段としてペープサートを活用したことは、主体的にかかわろうとする気持ちにつながり、友達と楽しく話し合ったりするなど、効果的であった。
- ・ ペアトークを取り入れたことで、自分の考えが出しやすかったり、友達の考えがイメージしやすかったりするなど、自信をもって取り組めた。



ペープサートの「大ちゃん」に語りかける

接続のポイント

<幼稚園>

遊びの目的が実現できるよう、自分の思いを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら遊びのイメージが共有できるようにする。

<小学校>

発達段階に応じた授業の展開や、お互いの考えを出したり聞いたりしやすい教材、場の工夫をする。

Ⅳ 実践から明らかになったこと

1 「学びの基礎力の育成」のための指導内容・指導方法の工夫

(1) 学びの芽生えから自覚的な学びへ

幼児期から児童期にかけては、学びの芽生えと自覚的な学びの両者の調和のとれた教育を展開する。

幼児期においては、調べる、比べる、尋ねる、協同するなどの様々な手法を組み合わせて楽しみながら課題を見出し解決する取組を通して、学びの芽生えから自覚的に学ぶ意識へとつながるように取り組む。

児童期においては、自覚的な学びを確立するとともに、楽しいことや好きなことに没頭する中で生じた驚きや発見を大切に、学ぶ意欲を育てる。



(2) 「3つの自立」と「学力の3つの要素」

幼児期の終わりから児童期における学びの基礎力の育成では、人やものに興味をもち、かわる中で様々なことに気付くとともに、それらを深め、広げていく過程の中で、自己発揮と自己抑制を調整する力を育む。

幼児期の終わりには、気の合った仲間同士の活動だけでなく、クラスにおける共通の目標を意識したり、自分の役割を理解したりして、集団の一員としての自覚を育てる活動を重視する。

また、「身近な社会生活、生命及び自然に対する思考力の芽生え」「言葉の正しい使い方」「豊かな感性と表現力の芽生え」について、今まで学んできたことを総合化し、小学校生活に向けて学びを高めていく。

児童期のはじめには、校時表や集団行動のきまりを理解し、自分の興味、関心に基づいた活動に夢中になって取り組む中で、課題を発見したり、調べたりすることで学習を深めていく。

また、学校教育活動全体を通じ、与えられた課題について友達と助け合いながら、自分が果たすべき役割をしっかりと果たし、楽しく充実した集団生活ができるような活動を進める。

さらに、各教科等の指導を通じて、「基本的な知識・技能」「課題解決のために必要な思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」からなる「学力の3つの要素」を培う。

(3) 幼児期と児童期が共通して抱える課題から

近年子どもの育ちについて、基本的な生活習慣が身に付いていない、他者とのかわりが苦手である、自制心や規範意識が十分に育っていないなどの課題が指摘されている。

また、小学校1年生の教室において、学習に集中できない、教員の話が聞けない、学習に対する意欲や関心が低いとの指摘もある。

双方の教育においては、双方の課題を共有し、その課題解決を共通の教育目標として教育活動を進めていく。

(4) 指導方法の工夫

これら(1)(2)(3)のことを踏まえて、一人一人がスムーズに移行できるよう、具体的にイメージした幼児期の終わりに目指す姿、児童期のはじめに目指す姿を参考に、幼児・児童の生活を見直したり、指導方法を工夫したりすることが必要である。

幼児期の終わりに目指す姿

- 1 基本的な生活習慣を身に付ける。
- 2 時間の見通しをもって生活し、友達と一緒に活動することを楽しむ。
- 3 自分の考えを伝えたり、人の話に気持ちを傾けて聴いたりする。
- 4 遊びの中で数量・図形や文字に関心をもつ。

児童期のはじめに目指す姿

- 1 興味、関心をもって学習の課題を受け止め、主体的に取り組む。
- 2 考えたり、話したりすることが楽しい。
- 3 友達と分かり合ったり、協力し合ったりする。



① 学びの芽生えから自覚的な学びへ円滑に移行するために

- ・ 幼児期においては、人やものに働きかけ、その中でおもしろいものを見付けたり、根気よく取り組んだり、試行錯誤したり、工夫したりすることができるようにする。
- ・ 幼児期、児童期においては、直接的・具体的な対象とのかかわりの中で、体験を重視した教育活動が進められるようにする。
- ・ 人やものとのかかわりを支えるために重要な役割を担う言葉や表現は、学びの基礎力をはぐくむ上でも重要である。また、学びの基礎力がはぐくまれる中で、言葉や表現も発達していく。このことを踏まえて、言葉や多様な表現を通してやり取りする中で気付きや思考を深めていけるようにする。

② 「3つの自立」と「学力の3つの要素」を培うために

- ・ 幼児期においては、幼児の興味・関心や生活、協同性の育ちを踏まえて、教師が方向付けた課題を自分のこととして受け止め、相談したり互いの考えに折り合いを付けたりしながら、クラスやグループみんなで達成感をもってやり遂げられるようにする。
また、思い通りにならないという経験を通して、自他の立場が違うこと、他者も自分と同じようにそれぞれの意志や欲求、感情をもっていることに気付けるようにする。
- ・ 児童期においては、幼児期における人とのかかわりの指導状況や実際の子どもの発達や学びの状況を把握した上で、与えられた課題について友達と助け合いながら、自分が果たすべき役割をしっかりと果たせるようにする。

③ 幼児期と児童期が共通して抱える課題を解決するために

- ・ 育ててほしい子どもの姿を共有し、その育成に向けた教育活動を推進する中で、学びの基礎力がはぐくまれるようにする。



2 幼児期から児童期に培われる学びの基礎力（事例から抜粋）

幼児期の教育ではぐくむ学びの基礎力			
視点	事例から見取った学び	視点につながる「学び」をはぐくむための教師の援助のポイント	小学校までに育つ視点につながる「学びの基礎力」
自己を調整しようとする力	事例1-1 ・自分の思ったことを素直に表現する。 ・友達の考えに共感し、友達と協力して遊びを進める。	・互いの思いに気付けるよう、教師は中立の立場で子どもたちの話を聞き、整理する。 ・友達の話が分かり、友達の意見を納得して受け入れられるよう、話し合える時間を十分にとる。 ・遊びのルールが分かりやすいように、その伝え方を工夫しようとする姿を認める。	・互いの思いを伝え合いながら、分かり合って遊びを進める。 ・きまりの大切さに気付き、守ろうとする。
	事例2-1 ・友達の困っていることに気付き、相手の気持ちに寄り添おうとする。 ・自分の気持ちを言葉で伝える。 ・遊びが楽しく進められる方法を工夫する。	・困っている友達に気付けるよう、遊びの様子を見守りながら必要な援助をする。 ・自信をもって自分の思いを伝えられるよう、一人一人の意見に傾き、共感する。 ・A児の気持ちに気付き、気持ちに寄り添って考えようとする姿を認める。	・互いの思いを伝え合いながら、分かり合って遊びを進める。 ・きまりの大切さに気付き守ろうとする。
考えようとする力	事例3-1 ・友達の工夫に気付き、自分との違いが分かる。 ・目的を実現するための方法を根気よく試す。	・自分たちで長く回せる方法が工夫できるよう、A児のこまのすごさに共感し、どうしたら長く回せるか気付けるようにする。 ・幼児の願いを受け止め、その思いが実現できるよう気持ちを支える。 ・友達と考えを出し合って遊ぶ楽しさが味わえるよう、幼児の柔軟な発想に共感する。	・友達の考えを取り入れて、工夫しながら遊びを進める。 ・目的が実現する方法を、今までの経験から予想して試す。
	事例4-1 ・箱の大きさや積み方によって、高さに違いが出ることに気付く。 ・友達に自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら、遊びを進める。 ・友達と力を合わせて目的を達成することができた満足感を味わう。	・友達と一緒に問題が解決できるよう、A児の困っていることに気付けるようにする。 ・考えを出し合ったり、考えたことを試したりできる時間を十分にもち、試す楽しさが味わえるようにする。 ・遊びの目的が実現できた喜びが、次の活動の意欲や問題を解決しようとする探究心につながるようにする。	・目的に合った形、大きさ、長さのものを選ぶ。 ・相手の考えが分かり、考えを受け入れたり、まとめたりする。 ・クラス単位で、友達と協力し合いながら遊びを進める充実感を味わう。
伝え合おうとする力	事例5-1 ・自分の気付いたこと、考えたことを友達に伝えたり、友達の考えを聞いたりする。 ・楽しく遊べる方法を工夫する。	・ドングリが転がらなくなった原因に気付き、友達と一緒に問題解決できるよう、話し合いを見守る。 ・友達同士で協力して進められるよう、A児の気付きを他の幼児にも知らせる。 ・友達と力を合わせて、根気よく取り組み、目的を達成しようとする姿を認める。	・人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。 ・友達と楽しく遊べるよう、友達と相談したり工夫したりする。
	事例6-1 ・身近なものをを使って遊びを工夫する。 ・友達の工夫に気付き、自分も真似てやってみようとする。 ・思ったこと、考えたことを自分なりの方法で表現する。	・友達とかかわり、遊びを工夫できるよう、遊びに必要な用具や素材を幼児と一緒に用意する。 ・友達の工夫に気付き、友達を認めたり友達の真似をしたりするかかわりを温かく見守る。 ・友達の真似をしながら、自分なりの工夫を見付けようとする姿を認める。	・友達の考えを取り入れながら、一緒に遊びを工夫して進めることを楽しむ。 ・思ったこと、考えたことを言葉で伝えようとする。

学びの基礎力育成の体験の連続性・一貫性について

- ・幼児期の教育と児童期の教育の共通の教育目標を共有することで、目標達成のための一貫した教育活動を推進することができ、連続した学びの基礎力をはぐくむことができる。
- ・小学校までにはぐくまれる学びの基礎力は、幼児期の活動とよく似た活動の中ではぐくまれるだけでなく、児童期の全ての教育活動においてはぐくまれる。
- ・学びの基礎力をはぐくむには、言葉や表現する力が重要な役割を担っている。逆に、学びの基礎力をはぐくまれる中で、言葉や表現する力もはぐくまれる。

※この表は、視点ごとに幼児期から児童期にはぐくまれていく「学び」を一覧にしている。

児童期の教育ではぐくむ学びの基礎力		
視点	視点につながる「学びの基礎力」をはぐくむ 具体的な指導の手法と教科「単元名」	小学校で育つ 視点につながる「学びの基礎力」
自己を調整しようとする力	事例1 2 ・話し合ったり協力し合ったりするのに適したグループの人数を考慮する。 ・自分たちで課題を解決していこうとする気持ちを状況に応じて後押しし、自己実現できた達成感が味わえるようにする。 《生活「あきってきもちがいいね」》	・友達と協力し、自分たちで生活を楽しむ方法を工夫する。
	事例2 2 ・お互いの思いや頑張り気付くのに適したグループの人数を考慮する。 ・グループごとに作戦タイムの時間をもつことで、グループ全員で協力したり、練習したりできるようにする。 《体育「ボール遊び」》	・相手の気持ちを大切に考えながら行動する。
考えようとする力	事例3 2 ・「キツネとタヌキのしっぽくらべ」という導入をすることで、児童が興味・関心をもって授業に臨めるようにする。 ・比べ方について、自分の考えを発表したり友達の考えを聞いたりしながら自分たちで課題を解決していけるようにする。 ・比べ方を自分たちで試行錯誤できるよう、ワークシートを配布する。 ・友達からヒントを得たり、教え合ったりできるよう、グループ活動にする。 《算数「おおきさくらべ」》	・今までの経験を生かして、目的が達成できそうな用具を選び、比べ方を工夫する。
	事例4 2 ・教師の手作り紙芝居を、教師のそばで読み聞かせる。 ・自分の生活経験からお話の世界がイメージできるよう発問する。 ・児童一人一人の発表に丁寧に共感し、自分の思いが受け入れられる、伝わる安心感が味わえるようにする。 ・場面ごとの絵を掲示し、絵を通して主人公の気持ちが考えられるようにする。 《道徳「2わのことり」》	・相手の思いに気付き、相手を思いやる気持ちをもつ。
伝えようとする力	事例5 2 ・家庭から持参したミニカーなどを活用して、経験を基に発表する機会をつくる。 ・児童の言葉の表現を補ったり、イメージを膨らませたりできるよう、自動車の写真を掲示する。 ・自分から発表しようとしにくい児童も、無理なく発表できるような機会をつくる。 《国語「じどう車くらべ」》	・相手を意識して自分の考えが伝わるように話したり、話を聞いたりする。
	事例6 2 ・教材は一度に読まず、場面ごとに挿絵を見せながら教師が読み聞かせをする。 ・自分の生活体験から主人公の気持ちが考えられるようにする。 ・ペアトークにペープサートを取り入れ、ペープサートを使うことにより、自分の考えを出しやすくさせるなど、伝え合う楽しさが味わえるようにする。 《道徳「どこんじょうだいこんの大ちゃん」》	・人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。

- ・互いの教育を見通すことで、つながりのある指導内容、指導方法を工夫することができる。
- ・学びの基礎力には、深化させていくものと、基本的生活習慣等、変わらず継続していくものがあることを意識し、学びの基礎力をはぐくんでいくことが必要である。
- ・児童期の教育においては、指導内容や児童の発達段階に応じて、幼児期の指導方法を取り入れることで指導方法のつながりを保つことができる。

おわりに

幼小連携については、以前から重要視され、幼稚園教育要領・小学校学習指導要領にも示されているとおりです。その結果、多くの地域で就学前の子どもと小学生の関わり、交流が意識的に行われています。さらに、教育課程の中に明確に組み込まれている所も見られます。

しかし、幼小における先生の共同的な学びはどうでしょうか。各校種では実施されているかもしれませんが、実際に子どもたちの学びに直接踏み込んで話し合うことは少ないのではないのでしょうか。

本来、幼小連携の最終的な目的は、各校種の先生の日々の学習指導の中に幼小の接続期を含めた潜在的な意識をもつことです。子どもの同志の交流や合同実践だけではなく、その結果をもちよって自らの教育実践に活かすことなのです。つまり、幼小交流活動で終了ではなく、そこから校種の異なる教員が何を学び、その学びを自らの教育実践にどのように反映させるか、ということなのです。つまり、小学校に就学する前の幼児はあのような学びをしている、それならば小学校の教科の中でその力をこのように発展させていこうとか、小学校に行ったらあのように学びを実践していく、そうであれば幼稚園ではもっとこのように遊びの中での学びを考えていこうとすることです。

今回、兵庫県教育委員会の幼児教育推進事業で、踏み込んだ「接続期」の実践を行いました。委員会で話し合いながら、何度も「なぜ、今“接続期”の幼小連携か。もうすでに交流活動はしているのに。」という声が聞かれました。しかし、「遊びから学びへ」という課題について議論を重ね、とりあえず、小学校の先生は幼稚園に、幼稚園の先生は小学校に行き、幼小の教員のペアを中心に実践を観察し、その繋がりを話し合い、各教員が自らの実践を展開していきました。それぞれに苦労はあったと思いますが、「遊びと学び」の連続性を含めた踏み込んだ内実のある成果があったと思います。幼稚園側の体験的な遊びからの学びが、小学校の教科としてこのようにつながっていくのだ、という事例を整理することが出来ました。その際気を付けたことは、活動の連続ではない、ということです。例えば、幼稚園で実施しているリレー遊びが小学校の体育のリレーに直結しているのではなく、あれこれ相談しながら幼児なりのリレーを実施している姿から、話し合ってルールをつくりあげていることや人数を揃えることなど活動から学ぶ姿を道徳や算数といった教科の中で意識して反映させて授業を展開する、という工夫を小学校で実践してもらいました。

授業の展開は普段と変化がないと思われるでしょうが、小学校の先生の意識は変化していました。また、幼稚園の先生にとっては、幼稚園での遊びの中での学びの読み取りが明確でないと、幼児自身の学びの獲得があやふやになっていることも自覚出来ました。

今回の事業は、簡単にいくものではなかったと思いますが、幼小連携の実践に一石を投じる大きな1歩となったと言えるでしょう。今後、新たな実践を創り上げていく研究心をもった保育・授業展開をさらに期待しています。

学びの基礎力向上推進委員会委員長
兵庫教育大学大学院 教授
名須川 知子

学びの基礎力向上推進委員会委員名簿

構 成	所 属	職 名	氏 名
学識経験者	兵庫教育大学大学院	教 授	名須川 知子
	神戸大学大学院	教 授	伊 藤 篤
	神戸松蔭女子学院大学	教 授	春 豊 子
	頌栄短期大学	教 授	竹内 伸宜
幼稚園長会 関係者	兵庫県国公立幼稚園長会 神戸市立東灘のぞみ幼稚園	園 長	吉村 乃子
実践協力校園	川西市立川西北幼稚園	園 長	山本 由美子
	川西市立川西北小学校	教 諭	大川 知子
	明石市立明石幼稚園	主幹教諭	深津 久美子
	明石市立明石小学校	教 諭	岩村 淳子
	赤穂市立高雄幼稚園	教 諭	橋本 典子
	赤穂市立高雄小学校	主幹教諭	松原 優子
	朝来市立大蔵こども園	主任幼保教諭	磯 ひとみ
	朝来市立大蔵小学校	教 諭	植村 睦美
	丹波市立船城幼稚園	主任教諭	小西 あゆみ
	丹波市立船城小学校	教 諭	谷口 祥子
	洲本市立加茂幼稚園	教 諭	板家 加織
	洲本市立加茂小学校	教 諭	坂田 知子
事 務 局	兵庫県教育委員会事務局 義務教育課	課 長	横山 一郎
		主任指導主事兼 初等教育係長	本玉 義人
		主任指導主事	松田 和子

本報告書は、文部科学省の幼児教育の改善・充実調査研究委託費による委託業務として、＜受託者の名称＞が実施した平成25年度「幼児教育の改善・充実調査研究」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。



指導の手引き

幼児期と児童期の「学び」の接続の推進に向けて

平成26(2014)年3月発行

編集発行 兵庫県教育委員会